



Title	長崎原爆投下時における看護師の救護活動についての聞き取り調査
Author(s)	中尾, るい子; 松成, 裕子
Citation	保健学研究, 22(2), pp.9-15; 2010
Issue Date	2010
URL	http://hdl.handle.net/10069/23770
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-23T20:55:11Z

長崎原爆投下時における看護師の救護活動についての聞き取り調査

中尾るい子・松成 裕子¹

要 旨 原爆投下時において、自らも被爆しながら救護活動を行った看護師へのオーラルヒストリー法によるデータの収集を行った。口述内容からは、看護師としての使命感を持ち原爆投下直後から被爆者に対して看護活動を実施していた。その背景からは、原爆投下当時の惨状の中でも、すぐに救援活動を行えたのは戦前に行われた看護教育も大きく寄与しているのではないかと考える。看護師の役割や受ける教育が時代の変遷とともに変化しても、看護の対象者をいかなる時でも安全・安楽に、ニーズを充足し、心地良くしたいと願う看護の心は変わらないことがわかった。

保健学研究 22(2): 9-15, 2010

Key Words : 原爆 長崎 看護活動(2010年3月29日受付)
(2010年5月21日受理)

I. 研究目的

長崎は、昭和20年8月9日に原子爆弾が投下された。爆心地から南東約600～800メートル圏内に位置していた長崎医科大学（現長崎大学医学部）は爆風によって大破し、教職員・学生は893人、入院患者と付添い人は72人の命が奪われた。生き残った医療従事者・学生により、被爆者への救援活動が原爆投下直後から開始された¹⁾。

これらの救援活動を始まりとして、これまで長崎では被爆者を対象とした医学・自然科学的研究が盛んに行われてきた。しかし、救援活動を行った看護師らによる手記は発表されているが、看護師の活動そのものを分析対象とした研究はなされていない。

原爆投下からまもなく65年が経とうとし、被爆体験の風化が叫ばれている現在、原爆投下時に看護活動を行っていた看護師は年々高齢化のために少なくなっている。

今回、戦前・戦時中の看護教育を受けてきた世代の看護師が被爆という大災害時にどのように看護活動を行ったか、またその後の看護師生活の中にどう影響したかを、被爆者でもある一人の看護師に数回にわたるオーラルヒストリー法²⁾を用いてデータの収集を行った。

本研究は被爆者に対する看護という誰もが経験し得ない体験を研究対象としているが、1986年に旧ソ連ウクライナ共和国で起こったチェルノブイリ原発事故や、1999年に茨城県東海村で起こった東海村放射能漏れ事故などの重大な放射能関連事故の被害者に対する看護としても、今後学問的構築において繋がっていく価値のあるものである。

そして、研究を通し、日本だけではなく世界に被爆

の実態を発信していくことは、重要な使命の一つであり、被爆当時を生きた看護師の体験記録を残すことのできる最後の世代として本研究を行い、今後も看護学研究者により更なる研究が進められる一助となることを目的としている。

II. 研究方法

1. 対象者

対象者は、原爆投下時に自らも被爆し、長崎医科大学附属医院で看護活動を行っていた久松シノノ氏である。

2. データ収集期間・場所

2003年6月～2004年6月。この間2003年6月、同年9月、2004年6月の3回に分けて、面接によってデータを収集した。データは面接後、録音されたテープを忠実に文書化した。

データ収集場所は、久松氏が語り部活動をしているフィールドの「長崎市永井隆記念館」図書室で行った。

3. データ収集・分析方法

本研究は、オーラルヒストリー法²⁾を用いて行った。久松氏には、研究のためのインタビューを行うことを伝え、話す内容をカセットテープに録音することの了承を得た。全調査の内、2回について録音を行った。久松氏は高齢者であるため、1回の面接時間が1時間30分を越えないようにし、時折休憩をいれながら面接をおこなった。なお久松氏の発言内容部分は括弧『』内に記し、原則として発言をそのまま記載した。またオーラルヒストリー法²⁾に基づいて、久松氏のインタビュー内容を

1 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科

構成し、カテゴリー化した。

4. 倫理的配慮

対象者には、研究目的・方法・意義、研究協力の任意性、協力中断の自由、面接による不安や緊張・身体的苦痛などの負担が察知された場合面接を中断すること、結果の公表について本人、および家族に説明し、面接調査実施の承諾を得た。

Ⅲ. 結 果

1. 久松氏の背景

1) 看護師養成所への入学

『昭和15年に私が長崎医科大学付属看護婦養成所というところに入學してたんですね。』（2003年6月インタビュー）

『当時は看護婦養成所と言って2年。それからもうちょっと経ってからね厚生女学部になって3年間だったんですよ。女学校を出たような資格になりました。』（2004年6月）

『自分で選んだんですよ。だから自分で選んだんだからこれを私はよかったですよ。親にも迷惑かけないし学費も要らなかったしだから、自分で選んだんだから頑張らなきゃという気持ちもあったでしょう。』（2004年6月）

久松氏は第二次世界大戦が勃発する前の年に看護師養成所へ入学している。当時の看護師（看護婦科）養成は2年間であった³⁾。卒業後2年間は附属医院に勤務することが義務づけられていた。この頃のわが国は、戦局の拡大により衛生救護にあたる看護師の需要を急激に増大させていたために、昭和16年に看護師の最低年齢が18歳から17歳に、昭和19年にはさらに16歳に引き下げられた。そのため、昭和17年入学志願者より入学資格が14歳まで引き下げられた。昭和17年入学志願者より適用された入学資格は、「1. 品行方正ニシテ身体健全ナル者、2. 年齢14歳以上25歳以下ニシテ配偶者ナク且つ家事ニ係累ナキ者、3. 国民学校高等科を卒業シタル者又ハ同等ノ学力ヲ有スル者」³⁾と述べられている。

2) 看護師養成所の生活

『私どもね24時間寄宿舎生活、4人とか6人とかそれがまた非常にねいいんですね。』

『それで寄宿舎の生活って団体生活をしているから非常に意思統一が出来るんですね、食べるものも一緒でしょう。そしてまた食べ物が無いわけですよ。まだコウリヤンご飯とかね寄宿舎はまだその頃は、配給でお芋のようなものとか、たんぱく質が足りないわけ。私は小さかったからね、今の学生たちに教官をしている時に戦争犠牲者ってね、食べるものもない、しょっちゅう

この戦争が始まれば防空壕に入ってしゃがんどかならん。』（2004年6月）

久松氏が卒業した長崎医科大学附属医院産婆看護婦養成所の養成所生徒は特別の事情がない限り寄宿舎に居住することになっており、日常生活は看護婦在舎心得に基づいて行われていた³⁾と述べている。寄宿舎における集団生活も看護教育の一環として大きな役割を果たしたと考えられる。

3) 看護師として勤務

『それと私はね子どもが好きで小児科を一にも二にも三にも希望をとりましてね、小児科に勤務しておったんです。そうしまして、昭和18年にですね、主任に私は小児科でなつてとても楽しく働いておったんですよ。そうしましたら時の物療科の婦長がね、辞めまして婦長がいなくなった。そうしましたらね私に声がかかったんです。』（2003年6月）

久松氏は、看護師養成所を卒業後小児科の看護師として勤務していたが、物理療法科（現在の放射線科）の看護師長が退職したため、久松氏に物理療法科の看護師長として異動しないか声がかかった。

4) 看護師長として勤務

『断るなら早く行かんなんらんとって自分に言い聞かせながら断ろうと思つて行つたら、そうしましたらね先生（故 永井隆博士）がね「お久松婦長さんがみえたぞ。みんな集れ。」とこういわれるのね、いきなり、暗室とってレントゲンがありますよね。暗室の暗いところでね…、困つたなと思つた。』

『軍隊に行つてらっしゃるからですね、もう組織をきちんと守つて自分の役割をずっとつとめておられて何にも言われぬ。私は勤務中にはね一回も叱られたことがない。そして婦長さん婦長さんってね、もう久松なんて言われぬ。婦長さん婦長さんっていつてねみんながだから良くしてくれるんです。スタッフが、はじめから婦長さん婦長さんって私を大事にして下さるように先生が仕向けてくださいました。もうこんなすばらしい先生ていうのは私は毎日毎日もう本当に戦争で大変でしたけどねうれしかったですよ。』（2003年6月）

物理療法科看護師長への赴任依頼を断りに行つたところ、当時の物理療法科の助教授から熱烈な歓迎を受けて物理療法科の看護師長となる。久松氏はそのときに被爆し、その後当時の助教授である永井先生と一緒に不眠不休で被爆者の救援活動にあたる。

養成所の頃は全寮制がとられ、結婚と同時に看護職を退かなければならない時代でしたが、昭和34年、全国的にはかなり遅れたものの通勤制が認められ、『仕事

と家庭の両立ができるようになったのです⁴⁾』と述べている。当時、看護師養成所を卒業し、晴れて看護師となった後にも入寮が義務付けられ、結婚と同時に看護師を退かなければならなかった³⁾。そのため、必然的に看護師の年齢層は若く、久松氏は昭和18年に20歳という若さで看護師長に就任した。被爆の2年前から看護師のリーダーとしての役割を担っていたことになる。

2. 原爆投下前

1) 報道された情報

『広島8月6日の8時15分にあの原爆が落とされましたね。その広島のですね、爆弾の時も長崎の原爆の時もそうですがね、原子爆弾とは絶対アメリカも国もいってないんです。大型爆弾、新型爆弾とこういっている。新聞の片隅にもですね、「広島に大型爆弾落つ、被害は僅少なり」わずかですね、僅少です。それだけ新聞の片隅にちょっと出ていた。長崎大学も私どもはその原子爆弾であるということを知ったのは翌日だったんです』(2003年6月)

長崎に原子爆弾が落とされる3日前に広島にも原爆が投下された。しかし、8月7日の日本政府の声明は新型爆弾が投下された旨であった。そして、8月8日、「8月6日広島空襲被害状況報告書」⁵⁾には原爆の空中爆発による攻撃であると断定されている。当時、国民には真実とは伝えられず、正確な情報が報道されていなかった。

2) 長崎医科大学学長の予感 1945年8月8日

『被爆の跡を私どもの角尾学長が所用が上京していたのですが8月の6日、ずーっと7日一日おいてですね8日、8日に広島にかかったわけです。乗り継ぎ乗り継ぎして歩いたり、ちょっと車に列車にも乗ったり、乗り継ぎ乗り継ぎしてバスのようなものに乗ったりして、時の学長は大学の大詔奉戴日にどうしても8日に午前中にいつものように着きたいから、その願いで一所懸命になってようやくたどり着かれました、間にあわれました、大勝奉戴日に。それで、先生はその時も広島に大型爆弾が落ちた。その悲惨さを話されたんです。二日経ってる、あの跡の。もうそう長くしないうちに長崎医科大学も狙われるだろうというような、引き締まっていこうというようなご注意も頂いておったんです。』(2003年6月)

医科大学長のこの予感発言については、「思えば、昭和20年8月8日の大詔奉戴日に大学の運動場に集合した時の訓示が今さらのように思い出されてならない。」とし、「学長会議のため東京に出張して帰りの8月7日に広島市に入ったが、広島市は8月6日の午前8時15分頃にB29数機による新型爆弾の攻撃を受けた。新型爆弾はマグネシウムのようにピカッと光ると同時に物凄い爆風及び熱風により、一瞬のうちに広島市は広い範

囲に壊滅的被害を受け、山陽本線は海田市駅から五日市駅迄が不通となっていた。その間を歩いて帰ったが、広島市の中心部は一面の焼野原と化しており、途中死者が沢山ころがっており未だ燃えている所が沢山あった。犠牲者が何万人か判らないが多数あった模様である。若し長崎市に新型爆弾が落とされると長崎医大も相当ひどい被害を受けることになるので、今週の土曜日の8月11日から大学の疎開を考えておる。諫早市方面への疎開を具体的に実施する予定である⁶⁾と記載されている。また、長崎大学名誉教授故調来助教授も長崎医科大学原爆被災復興日誌に8日当時の状況を「特に嚴重に警戒する様に当番学生にも申渡した。」⁷⁾と記述されている。時の学長が何故このような発言をしたのか、具体的に大学の疎開の日時まで考えていたことは驚くべきことである。

3. 原爆投下後～救援活動

1) 原爆投下後 1945年8月9日 11時02分

『被爆しました時は鉄筋の中におりましたのであれが落ちるんです、天井が一部分、天井が落ちたり棚が外れてもうとにかく下敷きになってしまったの、私は、もがいてもがいて出ました。その時にね私の部屋に水道があったの。水道の蛇口にも爆風で開いてジャージャー水が流れてる。2、3分真っ暗闇になりました。原爆が落ちたらね、もう真っ暗闇。その音は聞こえているんです。看護婦が「婦長さん」と呼ぶ声も聞こえているんです。見えないからそして私生きているのか死んでいるのか分からないからね、脈を取ってみました。動いてますね、心臓を見ても…生きてはいるようだけどどうなっているんだろうかとしばらくしていた。』

『地獄そのまま地獄絵…そしてみんな右往左往しているんですね。私はねみるみる間に靴もなくなる、はがれてなくなる、まあ着ているものはよかったですけどね、患者さん負傷者が6人ぐらい前も後ろも取り巻かれてしまった。そしてどうにもならない。動きが取れない。だけどね水道の蛇口がジャージャーとしていて、のどにごみが詰まってもものも言えない。そしてそこにちょっと走っていったうがいを1、2回して顔をプルプルと洗ってですね、それから作業にかかりました。』(2003年6月)

爆心地から南東約600メートルに位置した長崎医科大学附属医院で被爆をした久松氏は、建物の下敷きになった。しかし、すぐに立ち上がり業務にもどって患者の救助に取り掛かろうとしている。自分の身が危険にさらされた状況であっても、常に看護師として患者の身を案じる姿勢でいた。

2) 家族の迎え 1945年8月10日

『姉と弟がね三重村とって今漁港ができていますが、そのずっと先のほうが私の生まれたところですね。そこ

から歩いてですよ、原爆の翌日。まだそこらくすぶって危険な状態、私を気遣って両親が遣っているんですよ。どうしているか。もう死んでいるだろうと。病院の玄関にきたら永井先生がね玄関におられて指揮を取っておられたんですね。そしたら「婦長さんは元気。奥のほうで負傷者の治療をしている。あなたたちはこんな危険な場所に。はよ（早く）帰んなさい。」って言ってね会わせなかった。そしてちょっとした食べものを持ってきていた。それは僕が預かっておくといって追い返すようにして返してくださった。』

『原爆の時はみんな家族に連れに見つけに来て連れて帰るわけ。私ども原爆っていうのは翌日にしか知らない。広島にも落ちてるのにね。それでね私はその後、姉と弟と訪ねてきたのにあわせずに追い返したと。』（2004年6月）

久松氏は家族が迎えに来たことも知らないまま、実家に帰らず被爆者の救援活動を続行した。病院という組織のために動かなければならなかった⁸⁾ 当時の状況が伺える。

3) 薬学専門部学生の救護活動 1945年8月9日
『薬専の学生の被爆状況ですね。外に暑いから裸になって休憩だから、… どうでしょう、その裸になって被爆をしたと言う人の状態はね、皮膚がバリバリになって、真っ黒こげて本当に真っ黒そしてばりばりになって、本当にこのあの細い注射芯が入らない皮膚そしてですね、のたうちまわっている、痛いんでしょね、どろんこになってね、息が切れないんです死に切れない、もう彼らはだめになってしまっただけ畜生って、おーい**、*、おーい、… お名前を呼んで励ましあうんです、そんなしながらね一人絶え一人絶えとするんです。そうしますと永井先生は適切な指揮を執られた。戦地に行ってこられたからね。「婦長さん家族がねこの自分たちの子どもを探しに見つけてくるだろう。その時に分かるようにしてあげるのが生き残るものの責任ですよ。」とこうして、何をするんだらうかと思ったら一体ずつ少し離してお札を立ててそしてですね。林っていったら焼けた炭になった木がありますからね、竹のようなものと板のようなものがあります。それに*、**、**というふうにしてずっと書いてね、そこに一体ずつそこに枕元において立てなさい』（2003年6月）

ひどい惨状で、ほとんどの学生が息絶えていったが久松氏は永井先生の指示のもとで残された家族のために、亡くなった学生の在籍していた証を残すために指揮をとっていた。

4) 部下の死 1945年8月10日
『私は自分の部下をですね、自分の部下を5人やっばり

大学のあそこに運動場で亡くしました。』

『首の周りに5ミリぐらいかすりの布が残って足首手首もう見分けはつかんのです。髪の毛は仁王様のようになって顔は腫れて真っ黒けでしょう、泥だらけでしょう。見分けがつかんのです。腫れて、誰が誰だか、それが困ったなと思って、どうしようかなとおもったら永井先生がかるうじてかすりのね模様が… しようがないから一体ずつうんと離して一体ずつしまっただけあげる。どんなするんだらうかと「材料は一杯あるだろう。キャンプファイヤーをするときにね、一体ずつに燃えるものを乗せなさい。一杯燃えるものはあるだろう。紙くずとかきのくずとか。」そして「準備が出来ました、火をつけてください」と私が先生に言いました。「君の部下だらう、君が火を付けないと誰がつけますか』

『婦長さん時間がありません。まだ負傷者は構内に一杯』ってね、そして「燃えてしまう頃にまた来ましょう。それまでは… 婦長さんは治療をしまわなければ」そうおっしゃる。また「はい」って言ってね、私も泣きながらね、ついていて… 』

『婦長さん三角巾があるだろう、メスもあるだろう、この三角巾でねここが大事な骨だから（咽喉あたり）、この骨を握りこぶしぐらいでいいからとってここにね焼けた炭で、*、**、**って言って5人の名前が分かるようにカタカナでいいから書いてやれ』一方の長布にも薬品をいれている救急薬品を入れる布で作ったバッグを肩から下げるんです。この片方に5人分の遺骨を取めて、こっちは… むかし赤チンと言った… の薬品をいれて「婦長さん、今夜はね薬専の学生が防空壕を掘りかけていたでしょう。あそこでね5人のお通夜をしましょう」防空壕にこのくらいの幅のもうガタビシした長いすが一つ入れてありました。そこに座って、お通夜をしましょう。』（2003年6月）

師長として部下の死という現実をすぐに受け止めて、悲しむ暇もなく亡くなった部下の遺体の始末をしなければならぬ状況は現在ではあり得ない状況であろう。一緒にその場にいた医師から「君の部下だらう、君が火を付けないと誰がつけますか」と言われて泣きながら火をつけた状況は、久松氏の人間らしい素直な感情が見受けられる。しかし、その状況でも悲しみに浸る余裕はなかったことはあまりにも残酷な現場であったであろう。久松氏が語ったこのときの様子は、永井博士（1995）⁹⁾ によって記述されている。

5) 第11医療団結成、救援活動

『やっど私どもね外に大きなね三方橋というバス停があります。三方橋で長崎バスに乗る通りで川があります。その川にですね大きな渡りの石があります。そこで歩いて初めて、三日目に着ているものを洗って、大きな岩に干しましてね生乾きを着て、それを着て私どもの陣地に

なっているところの畳の10畳ぐらいの間、一間はまたよそのひとが疎開している。一間が私どもがね蜂の巣をついたように頭だけこうしていたから足はこうしてね、…のときもこうして。…していたんですけど、小休止って言われてねやっとお休みの時間を頂いて、そうですね1時間あまりそれからすぐ活動を始めたんですね。』(2003年6月)

大学での救援活動を終えた数日後から、長崎市内郊外の山間部へ物理療法科の医師・看護師で結成された医療団は出かけて救援活動を行った¹⁰⁾。

IV. 考 察

1. オーラルヒストリー法による妥当性

オーラルヒストリー法とは、ある個人にその体験を口述してもらい、これを記録・分析する一連の作業を総称するものである²⁾。をこの研究に用いるメリットは、文字資料が存在しない全く未知のことを知りうるができることである。逆にデメリットとしては、収集したデータの客観性に欠ける点があることやデータの信憑性が完全に証明できないことである。大原¹¹⁾は、被爆者医療に関しては、医師についての研究はされていても、看護師の歴史としての研究は存在しないため、オーラルヒストリー法による詳細でリアリティに富んだデータは生存する看護師から直接収集する手法として適していると述べている。また、オーラルヒストリー法は、回想にたよらなければならないため、データのあいまいさが指摘される一方、人としてその時を生きた人々の個々の圧倒的なリアリティを持つデータであること、事実ではなく現実の焦点を当てるものであることがポイントである。同じ現象でもそれぞれの解釈や影響の与え方には問題があり、各個人の背景など注意深く分析を行う必要がある¹¹⁾とも述べている。そのため、久松氏のインタビュー内容をもとに、当時の様子が書かれた文献を用いて久松氏の置かれていた当時の背景を分析したことは妥当性のあることだと考える。

2. 口述内容について

1) 看護師としての使命感

原爆投下当時久松氏は22歳であり、長崎医科大学物理療法科の看護師長をしていた。原爆投下直後から物理療法科助教授であった永井隆博士と共に救援活動にあたっている。そのため、永井博士が残した原爆に関する数々の著書や原爆救援報告書の中に久松氏の看護活動の様子が記述されている。その後10年間長崎大学医学部附属看護学校(現長崎大学医学部保健学科看護学専攻の前身)の専任教員として教育の現場に身を置き、再び臨床現場へ戻り、定年まで同大学附属病院で勤務した。定年退職後から亡くなるまで、原爆投下当時の様子を語り部活動を精力的に行っている。また、2003年4月

からは、「永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター」の名誉センター長としても活躍している。

このような久松氏の背景と口述内容から考えられることは、若い看護師長であるが故に壮絶な状況に対してたじろぐことがあっても、常に患者を守るという使命感を常々発せられる言葉から感じることができる。久松氏がこの使命感を得た過程として、当時の看護教育がどのようなものであったのかと、その時代背景の影響も鑑みなければならない。

2) 救護活動における看護師の役割

原爆投下という緊急時に看護師がどのような看護をしていたのか分析すると、ほとんどは医師の指示のもとで救援活動をしている。看護の対象が原子爆弾の被爆者といういわば超急性期の患者であり、救援活動という名の看護は、おのずと目に見える傷の手当てや医師が行う治療の介助などが主なものとなるだろう。

原爆による急性放射線障害症状に対して、傷の手当て・火傷の手当て・排泄物の処理¹²⁾などに追われていたと考えられる。

久松氏へのインタビューの中で、原爆投下直後から多くの死と直面したことが語られている。それは、次から次へと亡くなる患者や原子爆弾の熱風と放射能により直視できぬほどの悲惨な死に方をした患者を手当てしなければならない。自らも被爆し、一瞬にして自分の見ていた風景・町並みが様変わりし、人も物も何もかもを失った中でも、久松氏は看護師としての使命感を持ち原爆投下直後から被爆者に対して看護活動を実施している。22歳という若き看護師長のどこからその原動力が生まれてきたのか考察していくことにより、これから私たちが変わりゆく時代に看護を行っていく上で必ず得られるものがあると考えられる。

3) 看護教育

久松氏が受けた看護教育の話が多く出てきた。当時の看護婦養成所の資料から詳細な看護婦服務規程が存在したことや、寄宿舎生活が義務付けられていたこと¹³⁾など、現代の看護教育よりもより管理された教育であったことが述べられた。これはわが国が戦時下であり、看護師が単に入院患者や外来患者の看護だけではなく、従軍看護師や空爆等の被害を受けた時の救助要員としても見込まれた上で養成されていたからではないかと推察される。また、一つの組織ができればおのずと軍隊調の管理体制が敷かれやすい時代背景であったとも考えられる。

原爆投下当時の惨状の中でもすぐに体制を建て直し、救援活動を行えたのは戦前に行われた看護教育も大きく寄与しているのではないかとと思われる。また戦争という有事に備えて、おのずと非常事態の医療活動について心構えがあったとも考えられる。

V. まとめ

今回、研究対象者を「原爆投下時に救護活動を行った看護師」という非常に限定したものに焦点を当てた。被爆者の口から語られる話は、何も飾らないドラマティックな内容である。しかし、心打つものが多くあり、被爆者が体験した情景を聞き手も同じように思い浮かべずにはおれない大変なエネルギーを持つ。久松氏が被爆地で看護活動をした当時とは比較にならないほど医療技術は進歩し、以前は助からなかった多くの人命が救われるようになった。この平和な世の中でも近年大災害や自衛隊のイラク派遣など静かに非常時の足音が聞こえてくるようにもなった。

しかしながら、看護師の役割や受ける教育が時代の変遷とともに変化しても、看護の対象者をいかなる時でも安全・安楽に、ニーズを充足し、心地良くしたいと願う看護の心は変わらない。同じベクトルの方向を目指すものであるが故に、研究を通して数多くの発見が得られるものと考えている。そして、本研究は、現代の災害時等における災害看護活動にも応用できる一面がある。そのためには、さらにインタビュー内容を詳細に分析する必要があると考える。

謝 辞

本研究は多くの方々のご協力・ご指導により実施することができた。特に2003年6月から2004年6月の間にわたって本研究のために貴重な体験をお話して下さった長崎大学医学部永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター名誉センター長の久松シノブ氏、また、論文や資料を提供していただいた放射能影響研究所児玉和紀先生、日本赤十字広島看護大学植田喜久子教授および岐阜大学医学部大原良子先生、さらにご指導をいただいた広島大学大学院保健学研究科片岡健教授、広島大学平和科学研究センター川野徳幸先生に深く感謝を申し上げます。これは、平成16年度広島大学医学部保健学科の卒業論文を一部修正したものである。

引用文献

- 1) 長崎大学医学部原爆復興五十周年医学同窓記念事業会 編集：長崎医科大学被爆五十周年記念誌 忘れぬ日，長崎，1995，23 - 35.
- 2) 清水唯一朗：日本におけるオーラルヒストリー - その現状と課題、方法論をめぐって -，文部科学省学術創成研究：暦象オーサリング・ツールによる危機管理研究，2002年度 - 2006年度：1，2003.
- 3) 長崎大学看護学同窓会：長崎大学看護教育百年のあゆみ 1903～2002 記念誌：8 - 31，2003.
- 4) 河本令子：長崎の看護教育のあゆみ，葦書房，福岡，1991，86 - 93.
- 5) 広島市役所：広島原爆戦災誌第1巻，広島，1971，301～311.
- 6) NGO 被爆問題国際シンポジウム長崎準備委員会 編集発行：長崎原爆被害総合報告・1977 原爆被爆者の実相 - 長崎レポート，長崎，1977，70 - 81.
- 7) 調来助：長崎医科大学原爆被災復興日誌，原爆復興50周年記念長崎医科大学原爆記録集：35，1995.
- 8) 調来助他：長崎 爆心地復興の記録，日本放送出版協会，東京，1972，99 - 126.
- 9) 永井隆：長崎の鐘，サンパウロ，東京，1995，113 - 118.
- 10) 相川忠臣他：被爆五十年後に見出された原爆記録，原爆復興50周年記念長崎医科大学原爆記録集：237-240，1996.
- 11) 大原良子：被爆者看護にあたった看護婦の体験，平成13年度～平成14年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書：9，2003.
- 12) 長崎市役所：長崎原爆戦災誌第1巻 総説編，長崎国際文化会館，長崎，1983，485-493.
- 13) 川西美佐，中信利恵子，岩切桂子，滝口成美，植田喜久子：ヒロシマ原爆被爆時に看護活動に携わった看護婦および看護婦生徒が受けた赤十字看護教育，日本赤十字看護学雑誌4(1)：87-97，2004.

Survey on the nurse's relief activity at Nagasaki atomic bombing

Ruiko NAKAO, Yuko MATSUNARI¹

1 Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

Received 29 March 2010

Accepted 21 May 2010

Abstract The subject of this survey is a nurse who was exposed to the atomic bombs, and joined relief activities after that in Nagasaki. Data was collected by taking dictation, also called oral history method.

The nurse had been executing relief activity to the radiation victims immediately after the atomic bombing with a sense of duty as a nurse.

The background of the times, pre-war nursing education contributed to the nurse's relief activities immediately after the atomic bombing, in the disaster areas.

Even though the nurse's role and the received education are changed, the nursing attitude has not changed. Nurses still wish that people's needs are fulfilled safely and comfortably, at all time.

Health Science Research 22(2): 9-15, 2010

Key Words : The atomic bombing, Nagasaki, Nursing care activity